

疑似体験型森林教室「白神バーチャル体験」について（中間報告）

東北森林管理局 津軽白神森林生態系保全センター 久保 翔太郎
津軽森林管理署 中村 拓哉
米代西部森林管理署 福田 雄貴

1 はじめに

私は業務で森林教室に携わる機会が年に数回あります。

森林教室の一般参加者や児童・生徒と接するうち、次第に感じるようになったことがあります。

1つは、一般公募の森林教室では高齢の方々の参加がほとんどであり、高齢の方々は森林を求める度合いが非常に強い、ということです。

高齢の参加者の中には途中で体調を崩す方や、体力的な面で集団の中から遅れをとってしまう方もいます。そうした方々との会話の中で印象に残っている言葉があります。それは、「科学が進歩してどんどん世の中が便利になったとしても、最後に人が求めるものは間違いなく自然環境だ」、という言葉です。森林教室終了後のアンケートでも同じように自然への思いを書かれている方が多くおり、そこから高齢者施設などに入居されて森林にふれる機会が少ない方々も、同じように「森林に触れたい」、という気持ちを持っているはずだと思うようになりました。

2つめは、児童や生徒などの年代では「森林がすばらしい」という知識が先行していて、そのすばらしさを実際に体感している人は少ないのではないかと、ということです。

地元の小学校で森林教室を開催した際、児童たちに自分たちが住む町の魅力を聞く機会がありました。すると、「白神山地」や「もり」という言葉は出てきたものの、近所の森林に実際に行ったことがあるという児童は『23名中2名のみ』と、少数でした。

この二つから、森林を室内に再現して、五感をフルに使った『疑似体験型森林教室』を行えないかと考えるようになりました。

歩行が難しい方や障がいを抱えた方にとっては無理なく森林の魅力や癒やしを提供できる場として使用し、若い世代の方には自ら森林に足を運ぶきっかけを作る場として使用するなど、広い世代に有効に使えるのではないかと考えました。

2 実施に向けての活動



(図1) 活動の流れ

そこで具体的に活動を進めて行くため、森林管理署の先輩にこの疑似体験型森林教室の企画を話したところ賛同をいただき、ともに活動をする事になりました。

最終的に東北森林管理局管内の若手職員15名で活動を進めていくこととなり、「やまぼんず」と名付け、月に1回程度活動しています。

作戦会議の中で、「ボランティア登録をすれば高齢者・障がい者施設で活動できるのではないかと」いう意見が出され、まずは高齢者、障がい者施設を対象として活動し、その後広い世代へと活動範囲を広げることにしました。

(1) 需要の把握

室内に森林を再現する方法について話し合い、実現性が見えてきたところで需要の把握を行いました。高齢者・障がい者の需要の把握のため、地元の社会福祉協議会へ行き企画の説明を行いました。担当の方から「施設の利用者は森林に気軽に触れられない人や、室内にいる時間が長い人がたくさんいるので、この取組は必ず需要がある」との反応がありました。また、とても興味深い取組だということで今後協力していただけることになりました。

広い世代向けの需要の把握はまず試行を行い、直接反応を伺うことにしました（図1）。

(2) 試行

一般の方々の需要の把握を行うため、試行を行いました。

① 試行準備



(図2) 壁紙を貼り終えた様子

ア. カメラで撮影した写真を拡大し、壁に貼っていきます。10枚の壁紙を使用し、室内を森林の写真で覆いました。これは「視覚」で森林を再現しています（図2）。



(図3) 落ち葉を広げた様子

イ. 床にシートを敷き、林内から採取した落ち葉を一面に広げていきます。

これは「視覚」、手に取った時の「触覚」、踏みしめたときの「音」、「葉の香り」で森林を再現する工夫です（図3）。



(図4) 煮汁を加湿器で放出

ウ. 嗅覚での再現は落ち葉だけではなく、木を煮てできた煮汁を使用しました。

ブナとクロモジを煮て煮汁を作ります。これを水で割り、加湿器で室内に放出します。これは「嗅覚」で森林を再現する工夫です(図4)。

エ. プロジェクターとスクリーンを設置し、会場の設営は終了です。

青森県深浦町にある津軽十二湖自然休養林の写真を使用し、ブナ林遊歩道の中を再現しました。

対象者が疑似体験空間に入る前の準備はここまでで、そのほかの五感を使った再現の工夫については対象者が再現空間の中に入り、プログラムを進めていく中で以下の通り取り入れました。

② 初試行

参加者は自営業、会社員、公務員の方々に、男性4名、女性1名の計5名です。



(図5) 散策マップでルート説明

ア. 最初に十二湖の散策マップで疑似体験するルートの説明を行います(図5)。

イ. 事前のルート説明にそって映像を流します。

目線の高さの映像で、映像と室内の地面が続いて見えるように工夫しています。これは視覚での再現の工夫です。

参加者から「森林を歩きたくなってきた」という意見も出されました。時折地際に生えている植物などの説明を行いました(図6)。



(図6) 視線の高さの映像

③ 試行の結果



(図7) クロモジを手にする参加者

④ 試行(2回目)



(図8) 社会福祉協議会ブログ

ウ. 映像にブナやクロモジが出てきたところで実物を手にしてもらい、肌の質感や香りを体感してもらいました。

クロモジは昨年秋に採取し、時間が経っても香りが抜けないよう、冷凍保存していたものを使用しました(図7)。

また写真には残っていませんが、味覚と嗅覚で森林を感じる工夫としてクロモジ茶を飲んでいただきました。

参加者がクロモジのにおいを嗅いだときの「ほかの木も嗅いでみたい」という声や、「今すぐ森林を歩きたい」といった意見などから、実施前よりも森林への興味を高めることができ、若い世代向けに実施した場合、森林の魅力を伝える事ができると分かりました。

高齢者・障がい者を対象として実施するためのアドバイスを頂くため、社会福祉協議会の職員の皆様にも体験していただきました。またこの取組の様子をブログでPRして頂きました(図8)。

この試行から、より自然の魅力を感じてもらうため、端材を使ったキーホルダーと、葉のしおり作りを取り入れました。この木工は、高齢の方でも簡単にできそうだと非常に好評でした。

3 実施



（図9）実施の様子

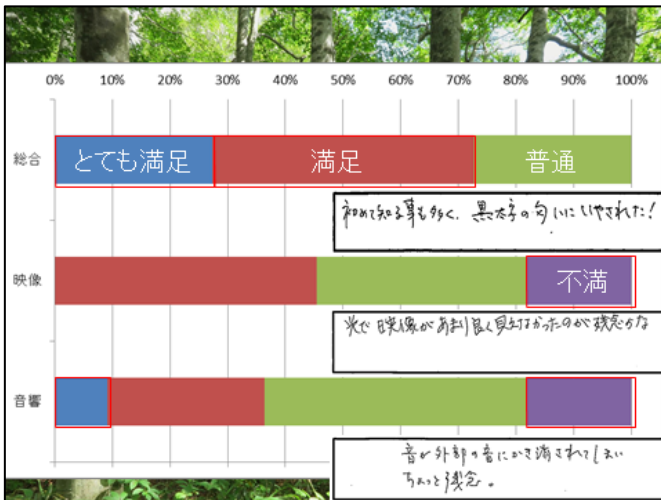
2回の試行を経て、本格的に実施することとしました。

当初は高齢者・障がい者を対象に実施する予定でしたが、メンバーの知人のご厚意により屋外イベントで出展させて頂けることになり、若い世代向けに実施することとなりました（図9）。

当日は疑似体験と木工教室を準備しました。1時間に2回ずつ実施し、計8回で30名程度の方々に体験していただきました。

また、任意でアンケートに回答していただきました。

4 実施結果



（図9）参加者のアンケート結果

アンケートの結果、総合的な満足度については『とても満足』、と『満足』、の割合が多い結果となりました。

『クロモジの匂いに癒やされた』、『こういう機会がないので良かった』などの意見がありました。

いくつかの項目に分けた満足度では、音響と映像の満足度で『とても満足』の割合が少なく、『不満』、の割合が多くなりました。

『音が外部の音にかき消されていた』『太陽光で映像がよく見えなかった』という意見がありました（図9）。

5 考察

試行や屋外イベントのアンケートや、対象者の感想として「森林に行ってみたくなった」という言葉が非常に多く聞かれました。

また、試行をへて屋外イベントへの出展を行い森林の癒やしや森林に触れる機会を作ることができたと感じます。

この2点から、疑似体験型森林教室は、『気軽に自然に親しむ機会を作る』という目的と『自然に興味を持つきっかけを作る』という目的を果たすことができると考えます。

一方で、取組全体に対する評価は高いものの、音響やスクリーンなど、設備面では課題が多くあることが分かりました。

6 今後の展望

まず1つめは、これまでの活動を通してはっきりとした設備面の改善を目指していきます。低コストかつ設置の簡単な設備となるよう、改善に向けて検討していきます。

2つめは高齢者・障がい者施設の方々へ疑似体験型森林教室を実施できるよう、準備をします。現時点で福祉施設では実施できていないため、社会福祉協議会からアドバイスをいただきながら、施設の利用者に森林浴体験を届ける事が出来るよう取り組んでいきます。

3つめは、この森林教室をより多くの方々に体験して頂き、もっと森林に興味を持ってもらえるようPRしていきます。

今後も自分たちも森林への理解を深めていきながら、おもしろそうだと感じたことに対して積極的に行動し、そのことで少しでも誰かの役に立てればという気持ちをもって活動を続けていきたいと考えています。